

# 探訪

うめすけの多古町

## 「開墾地のほこ誇りと埃」



多古町が千葉県の一員となり、今年で150年です。編入される少し前に幕府御用牧の開墾が始まり、順に数字と好字を組み合わせて地名をつけました。初富・二和・三咲・豊四季・五香・六実・七栄・八街・九美上・十倉・十倉一・十倉二と続き、最後の13番目が私のふるさと十倉三です。12カ所あった御用牧の一つ矢作牧を壱番～参番に分けて埴生郡十倉三村と称し、その後壱番が多古町に入ります(式番が旧大栄町、参番が成田市)。しかし与えられた名前は定着しませんで、殆どの人が、赤池、高堀、御料地などの字を使っていました。

時々訊かれるのが、「赤池には赤い池があるの?」。答えは、「あります」。ただしいつも普通の池、赤く見えたのは土埃のせいでしょう。開墾地の春一番はすさまじく、空も赤茶色に染まります。十倉三小学校は木造でしたから、強風が吹くと庭ほうきで教室の掃除をしました。

最近、赤い池が史跡だと知ります。牧にいた野馬の水飲み場だったらしく、牧を囲む土手堀が語源の高堀と関連していたわけですね。さらに西へ進むとシンボリ牧場の新堀(旧大栄町)、南へ進むと御料地に入ります。

皇室用の御料牧場になったのは取香牧の善、なぜ矢作牧なのに御料牧場の地と呼ばれるのか調べてみたところ取香牧だけでは広さが足りず、いったん御料に組み込まれ、戻ったあとも通称として残ったようです。

蛇足ながら、開墾地は次男や三男の入植が多く、安定するまでお世話になった本家への遠慮はあったでしょう。また我々の世代でさえ、悪気がないとは知りつつ、からかわれて理不尽な思いをしました。もちろん今は、開拓民の末裔であることを誇りにしています。そのためか、十倉三じゃなくても開墾地出身と聞けば、独特の親近感を覚えるのです。

# 戦争を見つめて

令和7年(2025年)は、昭和20年(1945年)の太平洋戦争終結から80年の節目の年です。広報たこでは数回にわたって戦争を振り返ります。

## 【戦争体験を聞く】高木光子さん

私は昭和10年(1935年)生まれで、太平洋戦争の終戦当時は10歳でした。8月15日のラジオ放送を聞いたときは、難しい言葉だったので内容は分かりませんでした。日本が戦争に負けたことは子どもながらに理解していました。戦争が終わったときはほっとしましたが、これからどうなるのだろうという不安もありました。今は平和な時代になってよかったと思います。



## 戦争は恐ろしく、悲しいもの

私は母子家庭で育ち、戦争当時は小さかったので覚えていないことも多いのですが、戦争の恐ろしさは強く心に残っています。空襲警報や、防空壕の中で聞いた飛行機の音はとても恐ろしく、目に見えない恐怖が迫ってきました。

実際に飛行機が戦っている場面を見たことはないですが、一度だけ遠くの方に爆弾が落とされたところを見ました。終戦間際の頃だったと思いますが、旧干潟町(現在の旭市)にあった飛行場に母親が勤労奉仕に行っていて、そちらの方向に爆弾が落ちたのです。そのとき母は爆弾でやられてしまったのではないかと思います。私は不安で泣いてしまいました。幸い、母はその日の内に無事に戻ってきてくれたので、とても安堵したのを覚えています。私や私の親族は戦争で生き延びることができましたが、学校には戦争で父親を亡くした子どもたちもいましたし、私の友人で勤労奉仕の作業中、不慮の事故で亡くなった方もいました。戦争や戦争の影響で亡くなった方、辛く悲しい思いをした方は多古にもたくさんいたと思います。

## 戦中戦後で苦勞したこと

戦況の悪化で兵器製造のための鉄が不足してくると、供出といって鉄製品を国が集めるようになりました。昔多古を通っていた軽便鉄道の線路や、一般家庭でも鍋やヤカンのような鉄製品を供出しました。物が不足していた時代でしたが、一番困ったのは食べ物ですね。今のように食べ物はどこでも手に入る状況ではなく、ほとんど自給自足でしたから畑でいろいろなものを作って食べていました。移動手段も今ほどありませんから、何kmも歩いてサツマイモを取りに行ったこともあります。食べるための工夫もいろいろしていて、甘納豆を一粒単位で買ったり、釜に残った米粒を集めて乾かして再利用したりもしました。食糧難は戦後も続いて、みんな食べることに必死でした。今の生活を見ると、こんな贅沢をしていいのだろうかと思うくらいです。食べ物を粗末にははいけませんね。



## 今を生きる皆さんへ

戦争はもう二度と起こしてもらいたくないですね。あんな思いは、これからの人たちにはさせたくないです。しかし残念ながら、今でも世界中で戦争は起きています。戦争の被災者支援の募金箱を見かけたら、少しでも協力できたらなんて思います。こういう時代があったことも心に留めていただきながら、今を生きる皆さんには幸せな人生を歩んでいただければ幸いです。



### 【編集後記】

戦争体験の話聞き、振り返ることは大変貴重な機会でした。私の祖父は、今回インタビューさせていただいた高木さんとほぼ同年代ですが、戦争で父を亡くし、苦勞して母や兄弟たちを支えていたと聞きました。私の場合は、少しだけですが戦争の話聞いておくことができました。時代が進めば、戦争経験者から話を聞く機会もいずれなくなってしまう。悲劇を繰り返さないためにも、できる限り記憶を聞き、残し、伝えていくことが必要だと思います。

## 俳句

## 文芸コーナー

## 短歌

※多古町俳句会では会員を募集しています。

※短歌の作成者名は雅号を使用しており実名と異なる場合があります。

- |                             |       |
|-----------------------------|-------|
| 母の日に母の思い出が笑顔                | 野老恵子  |
| 若葉風園児が手を振る箱車                | 内藤誠   |
| 桜葉降る樹下にじゅうたん敷くごとく           | 戸村しげ子 |
| 花曇り鉢に残りし昨夜の雨                | 萩原晶子  |
| 筑波嶺の裾野に遊ぶ鯉職                 | 木内慶子  |
| 燕来る新車の屋根に段ボール               | 高橋宮乃  |
| あかんぼの足裏に添ふ春の風               | 鈴木裕   |
| みどり児の寝顔ふつくら風薫る              | 平山眞理子 |
| いつとはなく母の面影浮び来し声出し笑いたる思い出なし  | 星野みつ  |
| おもさうな緑となりて六月の庭の木立の迷路はじまる    | 小川美智子 |
| 姪の手に力こもりて引かれゆく里の小川に架かる木の橋   | 鈴木沙和子 |
| こよなくも蜜柑の花の香りあてぼろぼろと散り地面を染める | 秋山裕子  |
| 網戸よりの風心地よく夕映えの梅の若葉のいまが美し    | 浅野婦久  |
| 垂れたる紫陽花の枝よけながら少し痩せたる野良猫が行く  | 秋山絢子  |
| 菖蒲湯にと友に貰ひし葉の元に黄緑色の花穂を抱けり    | 越川節子  |